

投稿先・集英社オレンジ文庫ノベル大賞

あらすじ

高校三年生の主人公、藤村駿は委員会の集まりの場で二個下の後輩、野中莉羽と出会う。初めは野中のことを大人しいやつだと思ってた駿だったが、話していくうちにだんだんとその印象が変わっていく。

三回目の委員会後、野中が駿に告白し付き合うことになる。

駿の幼馴染、鶴はそんな駿の様子をどこか心配する様子を見せるが、野中と駿は仲睦まじく、恋人という関係を楽しんでいた。

付き合ってから一ヶ月が経つころ、初デートの顔合わせ直後に駿は野中から「付き合うのはやめにしませんか」と言われ振られてしまう。

どうして野中が突然別れを告げたのか理解できない駿は、過去にあった忘れられない出来事が原因になって根付いたもう後悔はしたくなかったのに、という強い罪悪感が表面化してくる。

三年前、中学生だった頃、駿には幼馴染の少女がいた。

椿という名前の彼女は、駿の憧れだった。

だが、椿と恋愛の話になったことがきっかけで、自分が椿に抱いている感情がただのあこがれではないのかもしれないと気づいてしまい、そのことが怖くなり椿から逃げてしまう。

その二週間後、椿の両親から椿が花樹病という奇病に罹ったという知らせがあり、病院に向かうがもうすでに椿とは話ができない状況になってしまっていた。

その時の、もっとうこうしておけばよかったという後悔が根付いてしまった。

そんな駿だったが、鶴の説得により、野中に突然振られてしまった理由の手がかりを手に入れ、話をつけに行くが、今度は「痛いことが苦手なんです」という言葉を残し、野中は駿から逃げてしまう。

何が何だかわからなく、混乱する中、駿は一人必死に考え、ずっと椿との約束を守り育てていたアガパンサスの花がきっかけで、もしかしたら野中も花樹病に罹っているのではないか、という考えに行きつく。

その考えを確かなものにするため、駿は野中との話をつける前、椿の墓参りをし、自分が引きずっていた未練を断ち切る。

清々しい気持ちで野中との会話をし、疑問を確信に変え、もう一度、今度は駿からの中に告白し、野中は駿の告白を受け入れる。

無事、きちんとした形で付き合い始めた二人は、頓挫してしまった約束を果たすべく、もう一度、デートに行くのだった。

プロローグ 芽吹き

また今年も花が咲いた。

青く、小さい花びらがいくつもいくつも連なって花を形作っている、紫陽花にも似た鉢植えの花。

寒さを乗り越え地に根を張り、力強く、歳を重ねて咲き続ける花。

思い出深くて、忘れられなくて。

「……今年も綺麗だな」

乾いてきた土を、じょうろから落とす水で潤しながら、一人。ぽつりと呟く。

無事に咲いたことへの安堵と、また咲いてしまったという苦しさ、心臓をキリキリと握りつぶしてくる。

毎年毎年、それこそこの花が手元に来てから、ずっとこの気持ちに苛まれてきた。

枯らしたくない、ずっと綺麗に咲いてほしいという気持ちと。

早く忘れない、一刻も早く手放さなくてほしいという焦りが。

どうすればいいかわからない。

ただ、今のままじゃ駄目だということしかわからない。

時間が過ぎる度、この花が咲く度、焦りが増していく。

考えても何もならないと。

思考を整理しようとして、一度深呼吸をすると、また無意識にピアスを触ってしまう。

新しく開けたピアスに指が当たり、ジンジン、ツキツキとした痛みが、その一か所から

耳全体へと広がる。

触りすぎると雑菌が入って膿むから気をつけなきゃ、と思いながら、一度癖になってし

まったものはなかなか治らないものだった。

「三年目、か」

そろそろ前に進まないといけない。

そうしないと、俺は、また。

第一章 種

「めんどくせえ」

どうしてこんなことになったのか。

一年に一回しかない委員会選択。

今までのらりくらりと面倒なものを避けるように逃げ続けていたものに、まさかの慣れ

てきたと思っていた三回目で当たることになるとは。

しかも、十分に遊べる最後の時期に当たってしまった、ということにさつきからため息が止まらない。

学級委員なんてクラスをまとめる、なんてものは体のいい言い訳で、実際は教師どもの雑用を押し付けられるだけだ。

内心点を少しでもあげるために、なんて頑張ってるやつらもいるが、あいにく俺はそんな自己犠牲の精神は持っていない。

第一、そんな大層なものを掲げているならじゃんけんなんていう運試しで決めるべきじゃないだろう。

やりたいと言いつつ一人もいなかったのも運が悪いが、毎回人気がないはずだった第一希望に人が集まりすぎたのも運が悪い。というか、今日は朝から運が良かったことなどなかった気がする。

予想していたよりもずっと自分が苛立っていることはわかってるのだが、どうにかして別のことを考えようとしても、放課後無理矢理残らされているこの現状に嫌気が差し、何度目かわからない溜息を吐く。

あの時チヨキさえ出してなければ、なんてたればの話をしては否定をして、を繰り返している、待ちわびていたチャイムがやっとなり響いてくれた。

やっとなり、とうんざりとしながらいつ帰れるだろうか、と時計を見上げていると、真横の扉がガラツと勢いよく開き、驚いてそっちの方向に顔を向ける。

お決まりのように一気に教室中の視線が扉に集まる

「すみません、遅れました……」

シンと静まり返った教室の中でも関わらず、すぐ近くにいる俺がやっとなり聞き取れるくらいの声。

黒髪黒目でマスクに着崩してない制服。いかにも怯えています、みたいな反応してる大人しそうな女子生徒。

きよろきよろと周りを窺う視線の動きが

ああ、こいつも俺と同じで面倒事を押し付けられたんだななんて思いながら、視線を正面に戻そうとしたところで、その女子があたふたと席を探しているのがわかった。

もう集まりも始まる直前となれば適当に空いてる席に、なんて思ってもそんな都合のいい席は残ってるわけもなく。

一番近い席は、と軽く教室中に視線を巡らせると、幸か不幸か俺の隣くらいしか近場は空いてない。

隣に人がいるとサボれないからと占領していた荷物をどかし、視線を後ろへと回す。

「ここ、座れば？」

急に声をかけたからだろうか。

教室をさまよってた視線がぼつちりと俺のほうを向き、驚いたような、怯えたような反応をされる。

これは別にいいと言われるか？と荷物を席に戻す準備をしていたのだが。

「……ありがとうございます」

と、素直にお礼を言われ、今度はこつちが驚く番だった。

ここまで怯えた反応をされたら断られるだろうという予想を綺麗に裏切られ、おとなしそうに見えるのになかなか肝が据わってるんだな、と第一印象のとにかくおとなしいやつ、というイメージが少し覆される。

女子生徒が座るのを確認すると、教壇に立った教師がじゃあ早速だけど、と話を始める

。簡単な教師の自己紹介と、学級委員とはどういう仕事なのか、というありがたい話が数分

聞いているフリをして目を閉じてやり過ぎすが、面倒なことだから余計にだろうか。

話が進むのが遅く感じて、段々と苛立ちが募ってくる。

そんな時に。

「まずは隣の人と自己紹介をしてください」

なんて言われれば、面倒とかそういうのを通り越して、このまま帰って怒られたほうがマシなんじゃないかと思うくらいには苛立っていた。

高校生の、しかもこういう集まりなのになんだよ自己紹介って、と内心文句を言いつつ、机に肘をつき、手で目元を覆い深く溜息を吐く。

どうやって上手くやり過ぎそうか、と考えていたら、隣に座っていた女子生徒が様子を窺うようにこつちを向いてくる。

「よろしくお願いします」

「……よろしく」

「その、どちらが先に自己紹介しますか？」

説明したらこのままやらずに済まされるかもしれない、と思っていたが、浅はかだったらしい。

完全にやらなくちゃいけない流れを作られ、めんどくさいという気持ちが押しこみ切れなくなってくる。

「じゃあ俺から」

吐き出されそうな溜息を押し込み、さっさと済ませれば楽だろうと、自分から申し出をする。

「三年の藤村。よろしく」

趣味とか好きなこととかも話せと言われていた気がしたが、最低限名前と学年だけわかればいいだろう、と簡潔に済ませる。

「よろしくお願いします。……一年の、野中莉羽です」

何か続きがあるのだろうと思ったのだろうか。

数秒、たっぷりと間をおいてから、隣の女子生徒……野中が続けて自己紹介をする。

「よろしく」

不愛想だとか付き合にくいとか思われるだろうが、これ以上喋ることはないというように視線を横から正面に戻す。

こんなことがあと半年ちよつと、少なくとも一か月に二回はやらなくちゃいけないと思うと、今からものすごく気が重い。

やっぱり、あそこで運ゲーに負けたのは最悪だったと、もう何回思ったかわからないことを再度思い返すことになる。

早く終われ、と願いつつ、あと数十分をやり過ぎすしかない。

ああ、もう本当に面倒だ。

午後五時半。

部活に精を出している運動部の声と、かすかに耳に届いてくる吹奏楽部の練習の音、教壇に立つまとめ役の生徒の声がぐちゃぐちゃに混ざった眠気を誘う時間。

まだかまだかと数分置きに時計を見ながら待ち望んでいたチャイムがやっつと鳴った。

これで集まりは三回目だけど、何回目になっても最初に感じてた面倒だというのは変わらない。

高校生にもなつてクラス目標って何の冗談だ、と思いつながら必死に我慢してたが、だからと話が長引く上に後日クラスで発表をやれと言われてそろそろやめられるものなら辞めたい。

解散のあいさつをした瞬間に教室を出てやると決意をして立ち上がった瞬間に荷物を持ち上げ、あとはドアを開けるだけ、というところまできて。

「藤村先輩、このあとお時間ありますか？」

と、運もタイミングも悪く隣の席からそつと呼び止められた。

解放感でざわついてる教室内。

聞こえなかったことにしてこのまま逃げ帰ることはできるが、急用なら後から面倒なことになる。

結局、あの一回目の委員会の後も謎に席を固定され、野中とはずっと隣の席の間柄だ。野中が一年、俺が三年ということもあるのか、色々と面倒を見てくれと言われる機会もあり、なんとなくだが懐かれてるな、という感じはあった。

「まあ。急ぎの用事はないけど」

早く帰りたいという気持ちは隠さないが、一応というように言葉を返すと、ぱつと嬉しそうに野中の笑顔が輝く。

「迷惑じゃなければ、少しお話ししたいことがあるので……」

「いいよ」

「え？」

話が終わる前に肯定の意を伝えると、野中から驚いたような声が返ってくる。断られるとでも思ってたのだろうか。

ここで断ったら多分次も声を掛けてくるだろうから、それなら今終わらせた方が早い。

「別にいいよ。話って何？」

「その、ここでは話にくい内容なので、場所を移してもいいですか？」

なんとなくその提案にめんどくささを感じつつも、首を縦に振り肯定する。

「ありがとうございます」

嬉しそうに微笑む野中がこちらに背中を向けたタイミングで、こっそりと溜息を吐く。わざわざ呼び止めてきたということは急用か何かだろうか。

そんなことを考えながら、野中と並んで教室を出る。

どこに向かうんだと思ったら、野中が足を止めたのは学校の屋上へと続く踊り場。

屋上へ続く扉からしか光が入らないこの場所は、暗くなるのが遅くなったとはいえ、この時間になるとかなり薄暗い。

「それで。話って？」

真っ直ぐと野中のほうへと体を向け、話を促す。

どうか面倒な話じゃありませんように、と祈りながら野中の様子を見守っていると、普段なかなかみ合わない野中と自分の視線ががっちりとは噛み合う。

珍しさに少し身構えていると、少し震えた声で、野中に名前を呼ばれる。

なに？と声を返すより前に、野中が勢いよく頭を下げてきた。

「先輩のことが好きです。付き合って、くれませんか？」

勢いの良さに驚いて何も言えずにしていると、野中が顔を上げ息を吐く間もなく言葉を続ける。

「あの、まだ会ったばかりとか、色々あると思うんですけど、でも、先輩が好きだというのは本当で、罰ゲームとか、そういうのもないので」

胸の前で強く握られた手の震えが隠しきれない。

ああ、緊張してるんだなっていうのが伝わってきて、少し羨ましくなる。

突然のことだし、なんで告白されてるんだろうなという疑問は残るが、断る理由はない。

野中に対して一緒にいて嫌だとか、そういうこともない。

だから。

「いいよ。付き合おうか」

「……え？」

野中の言葉を聞き終えてすぐに返事をする、驚いたような反応をされ、予想外のこと。少し俺も驚く。

てっきりすぐに喜ぶような反応をしてくると思ったのだが、どうやら俺の返事は野中にとって予想外なことだったようだ。

「いいんですか!？」

「自分で告白したのに聞き返すんだ」

絵に描いたような動揺している様子が面白く、面白半分でそう言ってみると、これまた典型的な動揺が返ってきて、我慢できず噴き出してしまう。

「ごめん、冗談」

くつくつと湧き上がる笑いを必死にこらえながら謝罪を添えると、野中は不安そうな目を向けてくる。

「嘘でもからかいでもないよ。安心して。俺は君と付き合うよ」

「……ありがとうございます」

安心させるような言葉を並べると、少し落ち着いたようで安心したように微笑まれる。

「じゃあ、どうする？付き合った記念に一緒に帰ったりする？」

「……はい！」

突発的な提案にもかかわらず、野中は心底嬉しそうに返事をしてくる。

この反応で、さっき言っていた罰ゲームではないという言葉が嘘じゃないとわかり、理由もなくほっとしてしまう。

別にこの告白が罰ゲームだからと言って、傷つくわけでもないはずなのに。

「と言っても、帰る方向別だったら駄目なだけだよ」

「あ、私電車通学なので……」

冗談めかしの軽い口調で言ったことに、間髪入れずに生真面目に返してくる野中の様子に軽く笑みがこぼれる。

「俺も。じゃあ少なくとも駅までは一緒に帰れるな」

野中を好きかどうか。

一番重要なそれはまだよくわからないが、野中を可愛いな、と思う気持ちはある。

「じゃあ、校門のところでもう一回集合しようか」

「はい。ありがとうございます」

多幸感に包まれたような、そんな柔らかい印象を持つ野中の笑みにつられて笑みを浮かべる。

何ができるかなんてまだわからないが、まあ何とかなるだろう。

後悔さえしなければ、別にもう何でもいい。

「藤村先輩！」

昼休み、チャイムが鳴って間もなく。

朗らかで元氣よく自分を呼ぶ声がして、驚いてドアのほうを向く。

「野中？ どうかした？」

告白されて昨日の今日、しかも昼休みだから何かしら声を掛けられるだろうとは思っていたが、ここまで早く来ると思ってたからこの呼び出しは予想外だった。

「いえ、何かあったとかじゃないんです……」

野中との目線が一瞬合い、また外れ、が繰り返され、何かあったとかじゃないなら何だろうな、と思いつつ、野中の次の行動を待つ。

「先輩、お弁当とか持ってきてますか？」

数秒、しばらくきよろきよろと視線をさ迷わせていた野中だったが、意を決したように真っ直ぐに俺の目を見据えると、そう質問してくる。

「いや、これから買いに行くところ」

もしかして一緒に買いに行きたいとかか？と思いつつ言葉を返すと、野中の表情が嬉しそうにぱつと輝く。

「だったら、お弁当作ってきたので一緒に食べませんか？」

「え？」

まさかの提案に、咄嗟に上手い言葉が出てこなかった。

「迷惑だったりしたら全然大丈夫なんですけど、よかったら……」

「いいよ。どこで食べる？」

野中の言葉を遮るように、提案を受け入れる。

昨日の今日で行動力がすごいな、と驚いたのはそうなのだが、迷惑だとかそういうことはない。むしろ昼飯代が浮くのはありがたいことだった。

だからそこまで迷う理由もないと言うのに、野中は俺の返事を聞くと、驚いたようにばかりと少し早めに目を瞬かせている。

「どうかした？」

なかなか返事が返って来ないのを心配して野中の顔を覗き込むようにして様子を窺うと、じわじわと野中の頬が赤く染まる。

「い、いえ。嬉しかったので」

「そっか。それならよかった」

不安そうな顔から嬉しそうな顔へ、そのまま照れたような顔へとどんどんと変化してく野中の表情の変化には目を見張るものがある。

委員会での付き合いしかなかった時も結構わかりやすい素直なやつだなとは思ってみたけど、心を開かれるとここまでわかりやすくなるのか、と面白くなってくる。

「じゃあどこで食べる？」

「屋上に行く階段とか、どうですか？」

「昨日のところ？」

お互いの教室は学年が違うと入りにくいし、購買近くの飲食スペースは人が多くてこの時間には大変だし、と迷っているところに意外な場所を提案される。

「はい。少し暗いんですけど、人は来ないからその、二人つきりになれるので」

確かに、うちの学校は屋上が立ち入り禁止ということもあり、わざわざあの場所に行くという人は滅多にいない。

二人きりになりたい、なんて言われると思っただけだからびびくりしたが、確かに付き合ってるなら二人きりでいても何も問題ないだろう。

「いいよ。じゃあそこにしようか」

「ありがとうございます！ じゃあ行きましょうか」

軽やかに足を進める野中の半歩後ろをついて歩く。

廊下を進み、階段を上り、屋上から続く扉から光が入ってくる階段に並んで座る。

「どうぞ」

「ありがとう」

緊張しているのか、震えてる野中の手から弁当箱を受け取り、膝に乗せ開く。

「料理好きなの？」

「はい！ まだ練習中なんですけど少しずつできることが増えていくのが楽しくて」

「へえ。そうなんだ」

他愛もない話を挟みつつ、野中から受け取った弁当箱を開ける。

綺麗に並べられたおかずと、ちゃんと量もある中身をみて作るのが大変そうだなと思っ
たが、それ以上に食欲を掻き立てられる。

「いただきます」

横から刺さる視線を感じながら、箸を使い弁当の中身を口に運ぶ。

「その、口に合えばいいんですが……」

「うん、美味しいよ」

不安そうに、恐る恐る俺の感想を求めてくる野中を安心させるように素直な感想を伝え
る。

実際、想定してたよりもずっと美味しかった。

自分でも少しだけ料理をすることはあるが、その時作ったものよりもずっと美味しい。
「ありがとうございます！！」

ころころと表情が変わる野中の様子を見ると、可愛いな、という思いが湧いてくる。
自分が普段不愛想だとか、笑ってるのかどうかわからない、と言われるタイプだから
だろうか。

わかりやすく表情や反応で気持ちを伝えてくる野中といえるのは、ある意味新鮮で楽しか
った。

少しずつ、普段の様子やこの授業が、という会話を挟みながら、黙々と弁当を食べ進め
ていく。

多少の付き合いがあるとはいえ、まだ全然お互いのことを知らない状況だ。

何事もない普通の会話からも、なんとなく知らなかった野中の様子が伝わってきて、思
っていたよりも楽しかった。

「ごちそうさま。これ、洗って返すよ」

「あ、いえ、このまま受け取ります」

「本当？ じゃあありがとうございます。美味しかったよ」

丁寧に袋に弁当箱をしまい、野中に手渡すと、受け取った弁当箱を見て、視線を下げた
野中がふわりと微笑む。

「あの、明日も作ってきていいですか？」

俺の表情を窺うようにしながらそう聞いてくる野中に、どこか可愛らしさを抱く。

「いいの？」

「じゃあありがたく受け取ろうかな。無理はするなよ」

「はい！」

俺の返答に一喜一憂する野中に、小さい頃可愛がっていた近所の子犬を思い出した。

人懐っこくて、表情がころころ変わって、素直に甘えてくる野中を、俺は確かに可愛い
と思い始めていた。

「そういえばさ、一つ聞いてもいい？」

「はい、どうぞ」

「野中は何で俺のことを好きになったの？」

昨日野中が言っていたように、知り合ってから早い段階で告白されたから、告白を受け入れたとはいえ少し気になったのだ。

今まで誰かに告白された経験なんてなかったし、委員会中の自分の行動は褒められるものではなかったと思うから余計に。

「初めての委員会の時に言ってくれたこと、先輩は覚えてますか？」

「……俺、何か言ったっけ」

何とか思い出せないかと頭をひねってみるが、あの日のことで思い出せるのはずっと続いていた苛立ちだけだった。

「そんなに無理しなくてもいいよ。って」

「私、昔から人の目を見て話すのが苦手なんです。目を合わせると、相手から見られるんだなって思っちゃって、どうしても怖くて」

視線を下に向け、時々深呼吸を挟みながら、ゆっくりと言葉を繋げてくれる。

「失礼なことだとはわかってるんです。だから、頑張ろうとはするんですけど、意識すれば意識するだけできなくなっちゃって」

膝上で祈るようにして手を組み、緊張してるのか、震える声を誤魔化すようにして話す野中に、ここで言葉を挟むのは間違いだろうと、静かに次の言葉を待つ。

「だから、先輩と話すときも気を付けてたんですけど、やっぱり長時間目を合わせていられなくて逸らしちゃったときに、無理しなくてもいいよって言ってくれて、すごく嬉しかったんです」

そこまで言うと、野中はぱっと顔を上げ、俺の目を見て微笑んでくれる。

「ごめん、覚えてなくて」

「いいえ、気にしないでください」

俺にとっては何も考えないうちに出た言葉だろうが、野中にとっては俺を好きになるきっかけになった言葉だ。

それを言った俺自身が忘れてるのは失礼だろうと謝るが、すぐに野中に訂正され、驚いて軽く首を傾げる。

「先輩が思い出せなくても、それだけ自然に言ってくれたんだなってわかって、先輩のやさしさがわかって嬉しいので」

「そっか」

ふわふわと、柔らかく微笑みかけてくる野中の言葉に安心する。

ここでなんで覚えてないんですか？ と問い詰められてもおかしくないのに、問い詰めるどころか忘れている俺をそれでも優しいと、好きだと言ってくれるのだ。

「野中は優しいな」

「そんなことないです。私よりも、ずっと先輩のほうが優しいので……」

俺なんかよりずっと優しいだろうとそう言ってみるが、野中はすぐ否定するように慌てて首を横に振る。

そんな様子に、思わず手を伸ばして撫でてやりたいな、という気持ちが湧いてくるが、流石に失礼だろうとぐっとこらえる。

——思っていた通り、一歩進めたと思う。

人に告白されたのも、こうやって優しいと言われたのも初めてのことだった。

大丈夫。確実に、俺は変われている。

昨日からの野中とのやり取り一つ一つが、俺はずっとあの時のままなんかじゃないと、自分に言い聞かせられる、十分な材料になっていた。

「ねえ駿、何かあった？」

「何かって？」

授業と授業の間の短い休み。

まだ授業まで時間があるし寝るか、と思った瞬間に前の席から体を乗り出すように話しかけられたことにイラつき顔を上げると、その原因である人物は、俺がちゃんと言葉を返したことに満足したのか、にっこりと気持ちのいい笑顔を浮かべた。

「はぐらかさないでよ。ほら、恋人のことだって」

にこにこ楽しそうにしながら話題をぶつけてくる様子に、隠すつもりもなくなため息を吐く。

こいつ……つぐみ 鶴はこういう恋愛系の話には敏感な奴だ。

自分自身のことにもそうだし、周りのことに関しても同じ。

生まれつき色素の薄い茶髪と肌に、気配り上手で人懐っこい性格とくれば、必然的に周りに女子が集まってくる。

恋愛経験が豊富で、自分から進んで相談役みたいなこともしている、俺から見れば結構な変わり者だ。

ハムスターみたいとか、よく小動物にたとえられてるみたいだが、何の冗談だと笑い飛ばしたくなる。

幼馴染という立場から言わせれば、こいつはそんな可愛いで済むようなものじゃない。

好奇心と興味が第一で行動するような、相手にすると一番面倒な人種だった。

「今まで避けてたはずなのにさ、急に告白○したっていうから気になって」

「……別にそんな不思議なことでもないだろ」

そのうち食いついてくるだろうとは思ってたが、思ってたよりもバレるのが早かった。

。　　というか、どこからその話を知ったのか。

俺は直接鶴に野中と付き合ったことは話してない。

隠せないとは思ってたが、ここまで早く話が回るとは思わないだろう。

そのうち物珍しさで野中と一緒にいるのを見たやつが告げ口をするとは思ってたが、周りの人間の口の軽さに辟易する。

人の口に戸は立てられぬとは言いが、少しは当事者のことを考えてほしい。

「普通はね。だけど君のことだから敏感にもなるよ」

その、普段よりも少し落ち着いたトーンで話される音を拾い、ため息を吐く。

これで単純な興味だけだったらどれだけよかったか。

「子どもじゃないんだしそんなに気にしなくてもいい」

「そうだといいんだけど」

拒絶するようにきつぱりとそう告げると、鵜は何かを探るように目を細め、いかにも俺のことを心配してそうな表情を見せる。

幼馴染という関係上、家族と同等か、もしくはそれ以上に近い位置にいて長年過ごして
るせいで、隠し事なんてあってないようなものだった。

「ねえ、その彼女ってどんな子？」

なんて説明して納得させればいいのだろうかと頭を悩ませていたところに、ぱつと雰
囲気を切り替えるように質問を重ねてきた鵜に安堵する。

「どんなって」

鵜の質問を軽く笑い飛ばしながらそう返すと、鵜はまたにっこりと悪戯っぽい笑顔を向
けてくる。

「どうして告白OKしたんだろうって気になるからね」

もしかして直接聞くのを諦めて遠回しに話を聞きだそうとしてるのかと疑い、何を答え
るか迷っていると、鵜が更に机に身を乗り出して、目を覗き込むようにして視線を合わせ
てくる。

「可愛い？ その子」

「まあ。可愛いな」

鵜にしては話の踏み込み方が急だな、と感じなくはなかったが、今更隠してもにやにや
とからかわれて終わるだけだ。

だったら、諦めて素直に話しを進めたほうが早い。

「へえ。駿がそういうの珍しいね。一回会ってみたいかも」

「お前には合わないタイプだろうからやめとけ」

「えゝ薄情だなあ」

けらけらと楽しそうに笑う鵜の様子に呆れていると、空気が変わったように鵜の目が細
められた。

事情を知っているが故それほど深入りはしてこないだろうと思っていたが、こういう方向
に話を持っていかれると厄介だ。

面白半分な話でも、遠回しな探りでもそうだ。

「どんなところが可愛いなの？」

「しつこい」

「いいじゃん。こんな時じゃないと絶対に嫌がるんだから。特別」

拒絶し続ければ諦めると思ったが、予想以上に諦めの悪い鵜に、面倒だというのを隠し
もせずに溜息を吐く。

「人嫌いな猫が、自分にだけ懐いてくるような感じ。だな」

「……ん、そっか」

野中に対する率直な感想を話すと、鵜は何かを察したのか、それともやつと諦めたのか
、目尻を和らげると、机に乗り出していた体をもとの位置に戻した。

「花、今年も咲いたんでしょ？」

さて、時間は短くなったがこれで少しは寝られるか、と腕を組み机に突っ伏した瞬間、頭上から鶉の声が聞こえてくる。

「まあな」

家の窓際に置いた鉢植えの花。

数年前まで花なんて興味もなかったはずなのに、手放せていなかった。

「綺麗？」

「変わらずな」

あの花は根さえ腐らせなければ何年も繰り返し咲いてくれる。

だから、花さえ咲けば綺麗さなんて変わらない。

初めて咲いた年も、去年も、今年咲いた花も、変わらず綺麗だった。

「それならよかった」

俺が迷わずにした返事に、鶉は潔く納得したような、それでいてどこか釈然としなそうな含みのある返事をしてくる。

あの花は、俺が手入れをし続ければ、いつも変わらず綺麗に咲く。

だけど、それじゃ駄目だということもわかってる。

だから、気持ちを切り替えようと慣れないことをしてるんだ。

上手くいけばいい、上手くいってほしい。

どうにかして変わりたいから、今こうして行動してるんだから。

放課後。

もうお馴染みになってきた待ち合わせ場所の校門で、いつもの足音を待つ。

じめじめと湿度の高い空気が肌にまとわりつく。

そろそろ制服を冬服から夏服に変えてほしいな、なんて思いながら、シャツの袖をもう一回、無理矢理まくって少しでも通気性をよくしようと頑張ってみる。

ズボンのポケットからスマホを取り出し、何か通知が届いてないかを確認すると、ほつと一度、安堵の息を吐く。

学校の敷地を出たらまず何かメッセージが届いてないか確かめるといふ、癖になってしまった一連の流れに自嘲気味な笑みを落とすと、小走り気味にこちらに近づいてくる足音が聞こえてくる。

「先輩、お待たせしました」

来たか、と顔を上げると、ちょうどよく声が掛けられてそのタイミングの良さが心地良くなってくる。

「それほど待ってないし、急がなくてもいいって言ったのに」

軽く息切れを起こしてる様子が面白くて軽く声を出して笑うと、なんで笑うんですかとでも言いたげな、不服そうな視線が返ってくる。

「先輩を見たら、早く会いたくなっちゃって……」

「そうか」

素直に思ったことを伝えてくれる野中に、可愛いなという気持ちが湧いてくる。野中と付き合ってもうすぐひと月が経つ。

ここまでくると、最初の頃感じていた上手くいくかどうかという不安とか、そういうものはきれいさっぱりなくなっていた。

「息整った？」

「はい。大丈夫です」

「よかった。じゃあ行こうか」

そう声を掛けると、野中と並んで駅までの道のりを進む。

こういう時、付き合ってるなら手をつないだ方がいいのかなと思って提案したことがあるのだが、意外なことに野中はその提案に乗らず、初めて手をつなぐのはデートの時がいいです、と言われた。

そういう一度決めたことは貫き通す意外な意志の強さから、第一印象で野中に抱いていた大人しそうなやつ、という印象はもうほとんど残っていなかった。

今の野中への印象は、鶴にも言った人嫌いな猫が自分にだけ懐いてくれた感じ、だろうか。

それか、飼い主によくなついてくれる子犬かもしれない。

「そういえばさ、野中って今週の日曜暇？」

そんなことを一人で考えながら歩いてきたが、野中に確認したいことがあるのを思い出し、並んで歩く野中を確認しつつ声を掛ける。

「日曜日ですか？ 特に予定はないですけど……」

この提案をしたら喜んでくれるのか、それとも驚かれるのか、と内心少し楽しみにしながら笑いかけると、何を言われると思ったのか、ピクリと野中の肩がはねる。

「よかったら一緒にどこか出かけない？」

「え！？ いいんですか？」

「いいよ。野中はどこに行きたい？」

予想以上の、ある意味予想外な反応をしてくれる野中が可愛くて思わず声を出してわらってしまう。

こんな、ありきたりで平凡な提案だけでこんなに喜んでくれるなら当日はどんな様子を見せてくれるのか、と思うと、柄にもなく少しわくわくしてくる。

「えっと、映画とかどうですか？ 今少しきになってるのがあるので」

数分間、顔をしかめながらたつぷりと悩んだ後、野中が目を輝かせて提案をしてくる。

「わかった。じゃあ上映時間とか調べておくから、また詳しい話は連絡する」

「はい！」

野中が子犬だったら、今力いっぱい尻尾を振ってるんだろうな、と思ってしまうほどのいい笑顔と返事に、つられるように笑顔になる。

このままなら心配することなく数か月は付き合いが続くだろうな、と。

そう、疑うことなく信じてた。

それなのに。

「すみません……やっぱり付き合うのはなしにしてもらえませんか？」
「……え？」

初デート当日。顔を合わせてすぐ。

何の前触れもなく唐突に、野中からそう別れを切り出された。

「は……？」

「自分勝手だということはわかっています。だけどすみません、これで終わりにしてください」

「おい、ちょっと待て」

「すみません！」

踵を返そうとする野中を引き留めようとするが、聞く耳も持たずに走り去ってしまう。

何が起きたのか理解しきれなかった。

「……何なんだよ」

何が起きてるのか、全くわからなかった。

信じていたものが、呆気なく壊れるなんて。

「……また」

もう、繰り返ししたくなかったのに。

第二章 枯れ根

足を引きずるように帰り、自室に戻った瞬間安堵のような、諦めのような溜息を吐く。着替える気力もなく、羽織っていたカーディガンだけを脱いでベッドの上に投げ捨て、決まったように部屋の奥、窓辺に足を向ける。

重苦しい呼吸の中、窓を開けると、どろっとしたすつきりとしなない風が流れ込んでくる。
少しでも気分転換になればと思ったのに、これじゃ何も意味がない。

これならまだ締め切っていたほうがいいんじゃないかと思っただが、ふと、視線を下げる
と、鉢植えの花が目に残る。

こんな、決して爽やかな気分になれないような雰囲気の中でも、青い花びらはずっと
変わらず風の流れにそって揺れる。

「何がいけなかったんだろうな……」

手を伸ばし、指の背で小さな花びらを撫で、声を落とす。

野中と別れてからずっと、なんであんなことを言われていたのか、という疑問が頭から
離れない。

なにも特別なことはしていない。

待ち合わせ場所で顔を合わせて、適当に会話を少ししただけ。

その間何か言わなくていいことを言ったとか、やらなくていいことをやったとか、そう

いうことをやったならわかるが、そんなことは俺がわかる範囲では絶対にしてない。何か気に障るようなことをして振られるなら理解できるし、仕方ないと諦めることもできるだろう。

「ただ、それを聞く暇もなく逃げられたらどうしようもない。」

「一応、何も無いよりはとメッセーシアプリで野中に謝罪は送ってある。」

「ただ、返事どころかいつも送ったらすぐにつく既読も今日はいつまで経ってもつかない。」

「振られたんだ。それくらいは仕方ないとは思ってるけど、だけど釈然としないものがある。」

「何かできることはないかと思いを巡らせてみるが、一人で考えるだけでは何も考えが浮かばない。」

「――また同じようなことを繰り返して後悔しかできないのは嫌だった。」

「だから、恋愛をするのも必要以上に人と関わろうとするのも避けてきたのに、また同じことの繰り返しになるのか。」

「時間が経って、少しは変わったから。」

「何よりも、自分を変えるきっかけになると思ったのに。それなのに、また失敗した。」

「段々と、後悔やらやるせなさやらの影響で、思い出したくもないことを思い出しそうになる。」

「視界の端で、鉢植えの花が風に揺らされるのを見ながら溜息を吐き。」

「……寝るか」

「と、気持ちを入れ替えるように一言、静かに呟く。」

「自分の声がいつも以上に低くて、落ち込んでるのが丸わかりなことに自嘲に満ちた笑い声を落としながら、ベッドの上の上着を回収してハンガーに掛ける。」

「こんがらがって悪循環に陥りそうなときは、何も考えずに難しいことは頭から締め出したほうが一番手っ取り早い。」

「着替えて、シャワーでも浴びて、寝れば少しはすっきりするだろう。」

「難しいことはそれから考えればいい。」

「そっちのほうだが、少なくとも、今よりは考えがまとまるだろうから。」

「忘れられないことがある。」

「中学三年、色々な意味で人生の転機となってしまった、後悔と自責の話だった。」

「駿^{すま}ってさ、花好き？」

「窓から入ってくる風が冷たく、冬の訪れがもうすぐ見えてくるような季節に。」

「西日が痛く差し込む部屋の中。」

「二歳年上の幼馴染、椿^{つばき}に言われたことだった。」

「何？急に」

「女子はみんな花が好きとか、そういう話を聞いたこともあったが、椿に限ってはそんな話は聞いたことがなかった。」

「別に何もなければいい。少し気になっただけなの」

何かを急いでいるようなその椿口調に、何か違和感を覚える。

明るく、快活で、いつも歯切れよく会話を進めていく椿がこんなに糸の見えない、歯切れの悪い質問をしてくるのは不思議なことだった。

だから。

「椿は？」

なんとか質問の意図を見つけようと、質問を質問で返してみるが、困ったように苦笑を返される。

「私のことはいいから」

早く、と答えを急かさされ、どうしたものかと首を傾げる。

正直、花なんて興味がなかった。

今まで育てたことなんて、小学生の時に育てていた朝顔くらいだし、その朝顔にも特段思い入れもなかった。

だから、この場合俺が椿に提示する答えは俺が今思っているそのままを伝えるのが正解だろう。

だけど。

きつと、ここで椿が俺に求めているのはこれだろうというのはわかる。

「好きだよ。花」

正解か不正解か、はっきりとしたことはわからないが、だけどこで馬鹿正直に話をするよりはいいだろう。

「そうなんだ。意外かも」

そんな不安の中、椿の顔を窺うように返答を待っていると、しばらくして安堵のような、諦めのような、そんな複雑そうな表情を向けられ、何かあったのかと心配になる。

突拍子もないような、意図がわからない質問もそうなのだが、一番不安なのは椿のこの態度だ。

きつと、いつもの椿なら俺の花が好きという発言が嘘だとすぐにわかってからかってくるだろう。

「だろうな」

なのに、なんで今はからかってこようとしなののか。

どうして、そんな顔をするのか。

悶々と、答えの出ないことを必死に考えていると、隣を歩いていた椿が俺の顔を覗き込むようにして視線を合わせてきた。

突然のことに驚いて声も出せずにいると、椿の特徴的な猫目がにっと楽しそうに弧を描く。

「じゃあさ、私の代わりに育ててくれない？」

「……花を？」

「そう。花を」

椿から頼みごとをされること自体が珍しいのに、花を育ててくれ、なんてわけのわからないことを言われてこんがらがっていた頭が更に混乱する。

「別にいいけど、お前花とか育ててたのか？」

断る理由もないからと椿の提案を受け入れるが、何がどうしてそういう話になったのかというのはいくらもわからない。

「まあね。意外でしょ」

「そうだな」

今まで椿と話してきた中で、花が好きだという話は一回か二回しか聞いたことがなかった気がする。

その一回か二回の話も、こういう花を見るのが好き、というだけで、花を育てるのが得意とか、好きだとかそういう話は聞いたことがない。

日常のちょっとしたことでも嬉しそうに報告をしてくる椿のことだ。

花を育て始めたというのだったら、意気揚々と報告をしてくると思っていたのに、意外だった。

「でも、なんで俺なんだ？」

家にあるものなら家族に頼めばいいことだろう。

「駿なら大切にしてくれると思って」

「ふーん」

わざわざ運んでくるのも面倒だろうし、どうしてだろうと思っていたのだが、椿らしい考えていることが真っ直ぐに伝わってくる回答に、不思議と納得してしまう。

「それで、その花ってどこにあるの？」

重いものなら椿に運ばせるよりも、俺が直接受け取ったほうが早い。

だから、そう聞いてみたのに。

「そのうち渡せると思うよ」

椿から返ってきたのは、なんとも言えない曖昧な答えで。

「そうか」

どこか歯切れの悪いまま会話が終わり、質問の意図も、椿の考えてることもわからないままいつもの帰り道を歩く。

今は俺が中学生で、椿が家から近い高校に通ってるから一緒に歩いているが、卒業したら、それも変わるのだろうか。

初めて考えたその可能性に、嫌だな、と思ってしまう、その嫌だという気持ちにどうしてだろう、と疑問を重ねてしまう。

ずっと続いてた当たり前が、当たり前じゃなくなるからなのか。

それとも、別に原因があるのか。

「駿？ どうかした？」

ぐるぐると嫌な考えに思考が偏っていく間、無意識に歩くのが遅くなっていたのだろうか。

椿の声にはっと顔を上げると、椿との距離が少し開いていた。

「なんでもない」

めんどくさい、答えの出ない思考を、声に出して無理矢理振り切る。

考えても仕方ない。そのうちわかるだろうし、心配することもないだろう。

この時は、当たり前は当たり前前のまま進んでいくんだと。

そう、信じて疑っていなかった。

男女間での友情は成立するのか。

よく議論されているこの問いへの答えは、答えがあるように見えて実際、これが正しいという答えはない。

人の数だけ考えがあるし、答えがある。

だけど、俺は絶対に、男女間の友情は存在すると思ってる。

生まれてからここまで十五年間、椿とは、仲の良い幼馴染として接してきたから。

俺にとって椿は憧れの人でもある。

だけど、それは人間としての憧れの話であって、恋愛感情は一切ない。

そう信じてたし、そのはずだったのに。

「駿って好きな人とかいないの？」

「……はあ？」

椿から突然振られた話題に、自分でも驚くほど心臓が跳ねたのがわかった。

「はあ。ただ聞いたただけなのに酷くない？」

「急に変な話題振ってくるのが悪いんだろ」

「そっか。初心な中学生にはまだ早い話題だったかな？」

「そんなわけないし、からかってないで話を戻せ」

「はいはい」

椿からの軽口に、同じように軽口で返していく。

何を言っても言い返してくる椿の饒舌さに飽き飽きしてくるが、ここで負け惜しみで何かを言ってもまた同じように言葉が返ってくるだけで、何も話は進展しない。

最悪からかわれるだけだろうから、と諦め、大人しく椿の話が続くのを待つ。

「昨日さ、友達に言われたんだよね。椿は彼氏作らないのって」

数歩後ろを歩く俺を見ながら後ろ歩きをしていた椿が、くるっと片足を軸にして回り、前を向き直る。

黒い、手入れされ切った髪が、椿の動きに合わせて風に乗るようにはざりと揺れる。

「ほら、私ももうあと半年くらいで卒業じゃん？　そういえば華の高校生っていうわりにそういうことしなかったなって」

どこか悔いの残るような声色で、それなのに、今の状況に納得しきった表情で。

椿は淡々と自分のことを話していく。

「それでなんで俺に質問することになったんだよ」

そういえば、こうして椿と恋だ愛だのなんていう話をするのは何年ぶりだろうか。

小さい頃、それこそ椿が小学校低学年くらいの時が最後だった気がする。

「ただの興味」

「だろうな」

どうせいつもの好奇心だろうと思っていたが、予想が的中して溜息が出る。

そうじゃなければ椿がわざわざ俺なんかに恋や愛の話なんかしてこないだろう、と思っ
ているはずなのに、どこかもやまとした違和感が離れない。

「でもさ、気になることには気になるんだよね」

ぐるぐると、心臓のあたりをかき混ぜられるような焦燥感に戸惑っていると、椿が静か
にそう呟いた。

「何が？」

聞かないほうがいい、このままこの話は流して終わりにした方がいい、と心のどこかで
警鐘を鳴らしているのを無視して、椿の言葉に質問を投げる。

とにかく、この嫌な感じをどうにかしたかった。

「駿に好きな人いないのか」

「別に椿には関係ないだろ」

「それはそうなんだけどさ」

女子はみんなコイバナが好き、なんて誰かが言っていた気がするが、椿もそうなのだろ
うか。

心なしか、いつもよりも声が弾んでいるように聞こえる。

「中学生ってさ、良くも悪くもそういう話が出やすいじゃん？」

「そうか？」

「そんなもんだよ」

この手の話に慣れているのか、椿はところどころ挟む俺の相槌に適当に言葉を返してい
きながらも、止まることなく話を進めていく。

「卒業とか、受験とか。そういうのを意識しなくちゃいけなくなった今なんかは特にじゃ
ない？ だから、駿にもそういう話の一つや二つあるのかなって」

「ないよ」

「うそ」

嘘、と言われても本当じゃない。

確かに、周りからはちよくちよく誰と誰が付き合っ、誰と誰が別れて、という話は聞
くかもしれない。

だけど、俺自身にそういう類の話は縁のない話だった。

「本当だ。というか、嘘だったら放課後わざわざお前と歩いてないだろ」

どれだけ仲良くて、普通は幼馴染だというだけで、学年どころか、学校も、もつと言
えば高校生と中学生という間柄で待ち合わせをして一緒に帰ったりはしない。

ただ、俺たちはもうそれが習慣になっってるから、やらないと何か物足りないような感
じがするだけで。

「それもそっか」

もう少し話を掘り下げてくるのかと思ったが、思いのほかあっさりと納得した椿に、何

となく腑に落ちないというか、不思議な感覚が湧いてくる。

「意外だな。駿ってモテそうだからそういう話あるかと思ってたのに」

椿が言葉を重ねるたびに、ツキツキと小さい針が刺さったように心臓が痛む。

この違和感は何なのか。

普段しない話をしてるからなのか、それとも。

「まともな恋愛もしてないくせにわかったように言うなよ」

椿は、俺にとって幼馴染で、強くて、誠実で、だから、小さい頃からずっと、憧れてただけのはず。

「失礼な。私だって恋愛したことあるよ」

それなのに、なんで続きを聞くのがこんなに怖いのだろうか。

「昔の話だろ。小学生の頃の話なんか……」

「してるよ？」

「え？」

ざあっと、冷たい風が吹きつけてきて、椿の整えられた髪が流される。

夕方、いつもの道にいつもの風景。

いつも通りの当たり前の日常の延長線。

なのに、椿の笑顔が、いつものように俺をからかっているような、悪戯を企んでいるようなそんな子どもっぽい笑顔じゃなくて。

テレビの中のアイドルとか、そういう存在を見て、ああ可愛いな、と思う様な、そんな、遠くにいるような存在に思えて。

「恋、してるんだよね。今」

そんなこと、考えたこともなかった。

ただの幼馴染なら、ここで素直に応援できるはずなのに。

憧れの人というだけなら、頑張れ、とか、声を掛けられるはずなのに。

「そうか」

それなのに、なんで俺は今、椿が恋をしているのが、嫌だと思ってしまうのだろうか。

耐え切れなかった。

「ごめん、用事思い出した」

「え？」

椿に届いたかわからないが、精一杯震えそうな声で呟くと、前を歩く椿を追い越して走る。

苦しかった。

走ってるからじゃない、もっと、違う意味の苦しきだった。

呼び止めるような椿の声が聞こえた気がしたが、足を止める気になれなかった。

放課後、やっとのことで授業から解放されてスマホを開くと一つ、一件の着信履歴が入っていた。

「椿から？」

てつきり親から学校帰りに買い物に行ってこいと言われてるのだろうといつも通り、アプリを立ち上げたのだが、目に飛び込んできた差出人の珍しさに首を傾げる。

こんな時間に椿が連絡をしてくるのは初めてだった。

学校内でスマホが使えないと椿には伝えてるから、わざわざ昼間に連絡を入れてくることなんて今までになかった。

それに、いつもは椿との連絡はメッセージアプリで行うことが多かった。

電話なんて何時ぶりだろうか。

お互いが携帯を持てるようになってからは全然使ってなかった。

というか、それ以前に。

椿から逃げてから、俺から連絡をしにくくて、一度も連絡をせずに避けてきていた。

あの時から二週間。

帰り道、一緒に帰ることもなくなって、それから。これが初めての椿からの連絡だった。

……嫌な予感がする。

なんとなく、理由も根拠もないが、なんとなく、嫌な予感がする。

だけど、このまま放っておくのはもつと良くない気がして。

一度、大きく深呼吸をして、着信ボタンを押す。

「はい」

一回、二回、と呼び出し音が繰り返され、ぶつと呼び出し音が途切れると、あまり聞き覚えのない男の人の声が耳に届く。

「藤村駿です。えっと……椿の番号で合ってますよね？」

動揺して、考えていたことが一瞬全部吹っ飛んだ。

どうして、椿の番号にかけているはずなのに、男の人の声が聞こえてくるのか。

「そうだよ。久しぶり、椿の父親だ」

「……お久しぶりです」

嫌な予感が、段々と明確になっていく。

どうしてわざわざ、椿の親父さんが、椿のスマホから、俺に連絡してきたのか。

「時間がないから率直に言おうか。椿に会ってあげて欲しい」

「どういう、ことですか？」

わけがわからなかった。

会って欲しい？

椿本人から、会いたいと言われるのだったらわかるが、なんでそれを、親父さんから？

「椿が花樹病かじゅびょうに罹った」

「……え？」

心臓がどくりと大きく跳ねたような気がした。

……嘘だと思いたかった。

花樹病。

未だに何が原因なのかわかってない、解明されていない、いわゆる奇病とも呼ばれる病
気。
腕や足から植物の根が張り巡らされて、最後には。

……それに、椿が？

「どこに行けばいいですか」

スマホを持つ手が震える。

声が、足が、緊張した時のように震えて、隠そうと思っても、上手く隠すこともできな
い。

「市内で一番大きい総合病院はわかるかな？ そこにいる。部屋番号は……」

「すみません、あとでメッセージで送ってもらっていいですか？ すぐ向かいます」

失礼な行動だと思ったが、悠長に待ってなんていられなかった。

通話を切り、すぐに通知に気づけるようにと胸ポケットに携帯を押し込み走り出す。

学校指定のローファーが、肩にかけて鞆が走るのに邪魔だった。

早く、一秒でも早く走りたいのに、できることならこのまま鞆を投げ出して、靴を脱い
で走るのに、その時間さえももったいなかった。

駅につき、通学定期を叩きつけるようにして改札を通り、息切れが治らないうちにホー
ムにきた電車に飛び乗る。

電車に揺られてる間、息が詰まるような思いだった。

一秒でも早く病院に行きたい。

そんな逸る気持ちの中、震えが止まらない手で駅から病院までの道のりを確認しておく

スマホを握りしめながら、窓の外を見る気にもならず、ただただ項垂れていると、スマ
ホが通知が来たことを知らせる。

これが夢だったら椿からいつものようにくだらない話が来るのに。

そんな現実逃避をしても、メッセージアプリに届くのは、椿の両親から届く、椿がいる
病室の番号を知らせてくれるメッセージで。

ありがとうございます、と短く返事を打ち込み、すぐにアプリを消す。

少しスクロールするだけで、椿から届いていたメッセージが目に入るのが耐え切れな
かった。

目的の駅に到着するアナウンスが耳に届くと、すぐに立ち上がり、扉が開くと同時に走
り出す。

人が少ない時間でよかった。

思っていたよりもずっと走りやすい。

早く、早く、と嫌に鮮明な頭に響く自分の声がうるさい。

階段を駆け上がって、改札を抜けて、間違えないようにさつき調べた地図を頭の中で描
きながら、必死に足を動かす。

それほど駅から病院までの距離がなくてよかった。

普段体育の時間くらいしか運動をしないから、あまり距離があると到着するより疲れ切

るのが早くなってしまう。

疲れた、休みたい、と思ってしまう体に鞭を打ち、病院の敷地内まで必死に足を動かす。
流石に院内で走るわけにはいかないから、なるべく速足で、耳の中に反響する呼吸を整えながら、必死に足を進める。

受付を通り過ぎ、エレベーターに向かい上階へのボタンを押す。

到着したエレベーターに乗っている間、処刑台に立たされた囚人のような気分だった。まだ、夢なんじゃないかと思ってしまう思考が剥がれない。

だけど、刻一刻と現実を突きつけられる時間が近づいてきて、喉の奥がひりひりと焼け付くように痛む。

エレベーターが到着して、一部屋一部屋、部屋番号を確認しながら廊下を進む。

病院以外ではありえない、視界いっぱい広がる白と、ツンと鼻につくような薬品の臭いが、非現実感を掻き立ててくる。

段々と重くなってくる足を機械的に動かしながら、廊下を進む。

「……ここ、か」

廊下の一番奥、突きあたりに教えてもらった部屋番号を見つける。

開けたくない、と叫んでいる脳みそを無視して、震える手でノックをする。

どうぞ、という、電話口から聞こえてきた声と同じ声が聞こえてきて、恐る恐る、扉を開ける。

自然と、視線が下を向いてしまう。

だけど、見なければいけない。

これが、現実だと、ちゃんと確認しなくてはいけない。

だから、頑張って、視線を上げて……。

「……………椿？」

やっぱり、信じたくなかった。

信じられないんじゃないかと、信じたくなかった。

病室では、椿の両親が迎えてくれた。

しばらく会ってなかったけど、昔から印象が変わらない二人。

いつも、遊びに行くと、優しく迎えてくれたおばさんは、病室の奥、ベッドの傍で、涙を流していた。

「駿くん、来てくれてありがとう」

いいえ、という声が、きちんと声として出せたかわからない。

目の前の光景が、あまりにも現実感がなさ過ぎて。

椿にあって欲しい、と言われたのに、目の前に、なんで椿がないのか。

「椿からは、駿くんには何も言わないでくれと言われていたんだけど……伝えたほうがいいかと思って」

「……………ありがとうございます」

止められていたのに、こんな俺を呼んでくれた。

罪悪感で押しつぶされそうなのに、少し、嬉しいなんて思ってしまったって、自分の情けなさが嫌になる。

花樹病、という名前を、頭の中で反芻する。

花樹病。

植物が根を張るような細かい痣が腕や足の表面に出てきて、進行すると痣にそうように痛みが走る。

そして、最後には。

人の形を失って、完全な花や、背の低い木の集まりになってしまう。

だから、花樹病。

「症状が出てたのって、いつ頃でした？」

聞かないほうがいい。

そのほうが自分の為になると思ってるのに、どうしても、罪悪感から逃れたいために質問してしまう。

でも、聞かなきゃいけないことだと思うから。

「数か月くらい前って言ってたよ。腕から段々広がって、隠せなくなってきたのがちょうど二週間くらい前だったと思う」

ショックで目の前が真っ白になった。

気付かなかった。

花樹病は、根が張り巡らされる過程で痛みが伴うものだ。

ずっと一緒にいたのに、椿は、その痛みを、ずっと隠していたのか。

傲慢にも、気付いてあげられたら、と思ってしまう。

必死に隠そうとしていた感情が、じわりと滲みだしてくる。

「……この花、なんていう花ですか？」

来て早々、質問ばかりしていて申し訳ない。

だけど、これだけは聞いておきたかった。

どうせこうなるのなら、名前通り椿の花が咲いてくればよかったのに。

椿に、椿が眠っていたはずの場所に咲いているのは、名前も知らない青い花。

明るくて、快活で、いつも無邪気に笑ってて。

そんな、彼女の面影は。

「アガパンサス、という花らしい」

自分の名前が、名前になっていてあの赤い椿が好きなんだ、と話していた椿の表情を思い出して、心臓がぐつと握りつぶされるような痛みを訴える。

もう見れない、見れなくなってしまった笑顔が、青い花びらで覆われるようで。

恐る恐る、震える手を伸ばして小さな花びらに触れてみる。

しっとりとした、少し力を入れればすぐに傷がつくだろう、花びらの感触。

体温も、脈打つ鼓動も、期待していたものが一気に崩れ去る。

椿は。

「そう、ですか」

もつと言うべきことはあるはずなのに、喉から押し出せたのはその短い言葉だけだった。何とも言えないやるせなさに、ぎゅっと、喉が絞められるように引き攣る。

——少し前、椿にされたあの質問の意図がやっとなかった。花が好きか、なんて、今考えればヒント以外の何物でもなかったのに。なんで、あの時俺は、椿の本音を気付いてあげられなかったのだろうか。

いつも明るく、強気で振舞う椿が、実は臆病者だというのを知っていたはずなのに。椿が、椿の繊細さを、一番に理解していたのは、誰でもない俺だったはずなのに。

椿の、椿が残してくれた SOS に気づいてあげられなかった。揺れる視界の端から、つーつと、雫が落ちる。

「椿、なあ。椿」

ベッドの端、咲き誇る青い花の塊が終わってる場所。

本来なら手があっただろう場所に手をつき、名前を呼ぶ。

そうしたら、いつものように、どうしたの、駿と声が返ってくるはずなのに。

椿を呼ぶ俺の声は、どこにも届かずに花の中に落ちていくだけで。

名前を呼んでも声が返って来ない。

触れても、何も言われない。

こんなに、今にも崩れそうな、泣きそうなのを堪える、情けない顔をしてるのに、面白い顔、と言ってからかってこない。

何をしてても、もう椿は帰って来なくなってしまった。

あの時、椿を拒絶したまま、関係に戻すこともなく、何もできないままなのに。

まだ、俺は椿から逃げたままなのに。

ちゃんと、答えを出せてないままなのに。

それなのに。

椿は……椿が、いなくなってしまった。

声が聴きたい。

笑った顔が見たい。

我儘は言わない。傍にただいい。

やりたいことも、やってないこともたくさんあるのに。

他愛もない話をして、一緒に出掛けて、それで、それから……。

考えれば考えるほど、できなかったことが、かなえられなかったことが浮かんできて、堪えてた涙が嗚咽と共に吐き出される。

「椿……起きろよ、なあ。起きてくれよ」

一度口に出してしまえば、もう止められなかった。

椿に会いたい、話したい、笑顔が見たい、声が聴きたい。

ただ、いつものように隣で笑ってくれているだけで、それだけで、十分だったのに。それなのに、どうして。

「椿、なあ、椿、お願いだよ……起きて、つばき」

好きだ。

絶対に違うと避けてきた。

避けてきたはずなのに、どうしても。どうしても、今更になって抑えられなくなってしまった。

やっぱり俺は、椿のことが好きだ。

後悔しても遅いの。

この気持ちを伝えなきゃいけない人は、もう、いなくなってしまったのに。

拭いても拭いても止まらない涙と同じように、逃げていた、避けていた気持ちがどんどん溢れてくる。

少しの間だけでいい。

ほんの数分、数秒だけでもあれば、この気持ちを伝えることが出来るのに。

もう、それさえ叶わなくて。

俺が臆病なせいで、叶わなくなつて。

つらくて、つらくて、くやしくて。

胸が痛い。苦しい。

押し込むように抑える嗚咽が、ぐっと締る喉からこぼれ続ける。

どうしてもあの時に、もっと椿の話聞いておかなかったのか。

どうしても。

どうしても、あの時、椿と会った最後の時。

自分の気持ちに嘘を吐いて、臆病なまま逃げ出したのか。

「ごめん……ごめん、椿、ごめんなさい。ごめん」

青い花の上に、自分の涙が落ちていくのを、涙も拭えず、見ることしかできない。

謝っても何も変わらないというのはわかってるのに、うわごとのようにごめん、と繰り返す。

自分の無力さが憎い。臆病さが憎い。愚かさが憎い。

大好きで、憧れで、手放したくなかった人なのに。

話を聞いてあげてれば救えたかもしれない。

こんな、後悔しか残らない別れにはならなかったはずなのに。

後悔してももう遅いの、何もできないのに、いくら自分を責めたって、もう何もできないのに。

いくつもの、もしも、が頭の中で浮かんでは消えて、自分への非難が止まらない。

どうすればよかったのか、なんてわからない。

最悪な手段を選んでしまったことしかわからない。

何が正解なのかもわからない。

ただ、ただ、後悔と涙が止まらなくて。

悔しくて、悔しくて、辛くて、悲しくて。

こんなことになるなら、好きにならなきゃよかった、なんて。

三章 花香

優しい人だった。

何もかも、一から十まで全部、何もわからない状態で、迷惑しかかかなかったような私に、すごく、すごく優しくしてくれた。

あの時、あの言葉をかけてもらった時、物語のように、この人が私の運命の人なんだ、という確信をもって恋に落ちた。

一緒にお昼を食べたり、帰り道一緒に歩いたり、そういう些細なこと一つ一つがすごく幸せで。

恋に恋してるって言われてたけど、私はそれでも藤村先輩のことが好きだった。

好きはずだった。

だけど、あの日。

いつもとは違う藤村先輩を見て、運命の人だって信じてたはずなのに、怖くて拒絶してしまった。

今でも、先輩のことを信じたい、好きだって信じてる。

だけど、それよりも、怖くなっちゃって。

だって、私は、痛いことは。

「……最悪」

頭が重い。眠い。

授業が頭に入らないのはいつものことだが、今日は酷いことに頭もうまく回らない。

完全に昨日のことを体が引きずっていた。

気にしすぎるのはよくないとわかっているのだが、だからといって何もなかったことにしてまた新しく、なんていうことをできるはずがない。

結局、あの後もろくに眠れなくて、完全に寝不足だった。

家を出るときの記憶が曖昧で、ちゃんと鉢植えの水を確認してきたかと不安になっている。

もうこれで何度目かわからない重く、深い溜息を吐き出すと、目の前の席の椅子がガタンと音を立てて引かれる。

「あれ、珍しい。駿が昼休みに教室にいる」

どこか嫌味っぽく声を掛けられ、目元を覆っていた手をどけると、鵜がこちらを面白そうに眺める視線と自分の視線がぶつかる。

「お前だって珍しいだろ」

「そうかもね」

意趣返しのように言葉を返すと、当たり前のように言葉が返ってくる。

これはまた何か聞かれるな、と思うと、それだけでまた気分が暗く沈んでくる。

何かを言われるよりは自分から切り出したほうが、いくらかマシだろうと、何かいい答えが、と考え始めたところで、席から移動する気がない俺を見て鶴がこてん、と首を傾げる。

「彼女のところいなくていいの？」

「ああ、振られたからな」

「……早くない？」

想定通りの質問と、聞かれるだろうからと用意していた返事と、想像通りの言葉の応酬に、思わず自嘲的な笑みを浮かべてしまう。

「俺が一番そう思ってる」

何があったかなんて聞くな、という遠回しな拒絶をすると、鶴から向けられる憐みのような視線から逃れるように、窓の外へと意識を逸らす。

「何があったの？駿から振るんだったらまだわかるけど、この速度で振られるとか面白がる前に不気味なんだけど」

さっきまで俺をからかって楽しむ気満々だった鶴の声が、少し張り詰めたような雰囲気をもたう。

「わからない」

「はあ？」

いつもはここで鬱陶しい、めんどくさい、と思ってしまうのだが、今は藁にも縋る思いだった。

というか、恋愛関係の話だったら、俺よりもずっと、鶴に頼ったほうが確実だった。

「デートで顔合わせした瞬間に別れようって言われたんだよ」

「何それ」

いつもは遠回しな言葉を選んでくる鶴も、今回ばかりは話についていかなかったのだろうか。

直球で投げ返された質問に、場違いな笑い声が漏れ出してくる。

「心当たりは？」

「あつたらこんな悩まない」

「何か変なこと言った？」

「何も言っていないし、会話らしい会話もしていない」

淡々と、鶴に聞かれたことを余計な言い訳もせず返していく。

何回も何回も、なにがいけなかったのかと一人で考えて答えが出ないままもう丸一日過ぎたんだ。

頼れるところには、頼っていきなかった。

「じゃあなんなんだろうね〜」

「俺が知りたい」

お手上げだ、とでも言いたげにいつもの間延びした話し方に戻った鶴に、こいつでも駄目なのか、と溜息が出てくる。

そうなる、あとは頼れるところは……と数少ない頼り先を順々に思い浮かべていると

、ギシッと、鵜が座っている椅子に体重をかける音が響いた。

「私服がダサかったりした？」

これは放置されるかな、と一度考えるのをやめようとしたところにぶつけられた質問に、驚いて瞬きの回数が増える。

「お前と出かけるときの数倍は気を遣って選んでるから違う」

「ごめん冗談」

放り出されてもおかしくない、当事者でもない鵜から見たら完全に他人事な話なのに、どうしてこんなに付き合ってくれるのだろうか。

「駿さ、そのデートの時ってピアスしてた？」

「ピアス？」

自分でも考えていなかったことを聞かれ、上手く頭の中で処理が出来ずにオウム返しをしてしまう。

「そう。また増えたんでしょ？ 今両耳で何個？」

その問いかけに、学校では触らないようにしていたピアスホールを指でなぞる。耳たぶ、軟骨、となぞってき、ここは閉じたから、ここは残ってる、と数えていく。

「九個」

「それ、全部つけてた？」

「ああ」

「じゃあ原因それじゃない？」

やっとわかった、とすつきりしたような顔をする鵜に反して、何もわからないまま首を傾げる。

「ピアスが？」

「ピアスが」

どうしてピアスなんか？と思いつつながらまたオウム返しをすると、鵜はやっぱりわからないか、と言うように、大袈裟に肩をすくめる。

「駿ってほら、性格悪いから出会い頭に何か失礼なこと言ったのかなって思ったんだけど、そうじゃないんだったらそれしかない？」

「でもそれくらいで」

「ピアスが苦手っていう子結構いるよ」

食い込み気味に投げかけられた鵜の言葉に、驚いて目を見開く。

完全に盲点だった。

俺にとって、ピアスはもう日常の一部で、珍しいものでも何でもなかったから。

「耳たぶに一個くらいなら全然っていう子が多いけど、駿みたいに軟骨までバチバチに開けるのは怖いっていう子、女の子には多いんだよね」

「そう、なのか」

上手く言葉を組み立てられず、ただたどしく思ったことを口に出していくしかない。

元から回りきらなかつた頭を衝撃が支配していて、なかなか上手く思考を結び付けることが出来ないが、そういうことなら納得がいく。

あの時、野中は俺の顔を見て付き合うのをやめよう、と言ったんじゃないかって、俺がして
るピアスを見て付き合うのをやめよう、といったのか。

「まあ、これはあくまで俺の想像だから、ちゃんと話し合ったほうがいいよ」
そう言うと、鵜は真っ直ぐに俺の目を見据え、ずっと目を細める。

「俺はさ、駿がピアス増やしてる理由も知ってるし何かと相談にも乗ってるからわかって
ることが多いけど、莉羽ちゃんには話してないんでしょ？」

幼い子どもに言い聞かせるようなその口調に、どことなく安心感を覚える。
「そうする。……ありがとう」

「わく駿にお礼言われるのすっごい変な感じ」

「茶化すな」

軽口を叩きあう様な流れに、すつと頭にかかっていた重苦しい靄が晴れたようなすつき
りとした気持ちになる。

「まあ頑張れ」

「ああ」

鵜からの激励に、呟くようにして返事をする、頭をすっきりさせるために、一度大き
く深呼吸をする。

野中と話をつける。

もう、あの時みたいな後悔もできないようなことを繰り返したくはない。
逃げたくはない。だから、頑張るしかないんだ。

「野中、いる？」

放課後、ホームルームが終わると同時にスタートダッシュを決めるように教室を飛び出
し、野中のクラスに来ていた。

一緒に帰ろうと約束をしていた時、大体の時は俺が先に待ち合わせ場所にいたから大丈
夫だとは思っていたが、折角話をする決めたのに、出鼻を挫かれるわけにはいかなか
つた。

「奥にいますよ。呼びましょうか？」

「ありがとう」

手近にいる生徒に声を掛けて、野中を呼んでもらう。

ここから声を掛けてもいいけど、如何せん俺はこのクラスの生徒から見れば先輩なので
、大声で野中を呼んでしまうと、最悪そのまま逃げられて終わる場合がある。

一つ一つ、逃げられる原因を潰しつつ、ちゃんと今日のうちに答えを出しておきたいの
だ。

呼んでくれる、という生徒の背中を追っていると、教室の中ほどに野中の姿を見つける

その生徒に声を掛けられ、振り返ったところで一瞬だけ、野中と視線がぶつかり、遠目
からでもわかるほどびくりと野中の肩がはねたのが分かった。

逃げられるなら追わないと、と何時でも動ける準備をしようとしたが、数秒、その場で

まよったような素振りを見せた野中だったが、もう一度俺と視線を合わせると、意を決したようにこっちに向かって歩き出した。

無事、第一関門は突破出来たようで、一人安堵の息を吐く。

「……何か、ありましたか？」

「話をしに来た」

いかにもこの場から逃げ出したいです、と訴えかけてくる野中の視線を無視して、にっこりと笑いかける。

「とりあえず、場所変えようか」

流石に、この場で別れる別れないの話をするのは、野中にも、このクラスの生徒にも迷惑だろう。

野中の返事を待たないうちに歩き出すと、野中は驚いたような表情を見せるが、大人しくついてきてくれた。

「どうやって話を切り出そうか。」

どうすれば上手く話を運べるか、と最終確認をするように必死に頭を動かしながら足を進め、やってきたのは、いつもの屋上へと続く階段。

俯き、俺の視線から逃れようとする野中を、それでもあきらめることなく真っ直ぐに見据え、口を開く。

「それで、話なんだけど」

「私は何も話すことはないのです……」

「あんな突然別れるって言われて俺が納得すると思った？」

発言を遮るように言葉を被せ、語気を強めに話を進める。

「優しい先輩なら納得してくれます」

「じゃあ俺は優しくないから無理だな」

野中の言葉を一刀両断し、言い訳ができない状況にして逃げ道を一つ塞いでしまう。

「何か気に障ることをしたなら謝る。とにかくなんであんな急に別れようなんて言ったのか教えてくれ」

どうしても、このまま逃げられるのは、終わりになるのは納得が出来なかった。

いつもよりも語気が強めなのは理解している。

もしかしたら怖がらせてしまうかもしれない、という考えが一瞬頭を過ぎるが、逃げられるよりも断然マシだった。

「それは……」

「ピアス、嫌だった？」

昼休み、鵜に言われたことを思い出し、できる限り気持ち伝わるように、と言葉を並べてみる。

「苦手かどうか聞かなかったのはごめん。今度から気を付けるから……」

「違う！！」

驚いた。

今まで、野中は俺の話を聞いてから答えを出すことが多かった。だから、話を遮られる

ことなんてなかったのに。

いや、それ以前に、野中が俺の話を否定するようなことは、これが初めてだった。

「違うんです。ピアスも、そうなんですけど、でも……」

「でも？」

そこで止まってしまった野中に、続きを促すようにできるだけ優しく、と意識して声を掛ける。

何を言われても大丈夫、そう思ってたから。

「私、痛いことが苦手で」

「……え？」

一度聞いただけでは上手く処理しきれない言葉に、聞き返すような声を返してしまうと、野中があの日、告白の時のように勢いよく頭を下げた。

「ごめんなさい！」

突然のことで、反応が遅れた。

踵を返そうとする野中の服を掴もうと手を伸ばす。

が、野中に怯え切ったような瞳を向けられて、伸ばす手を止めてしまった。

「……………最悪だ」

野中がいなくなると、一人になってしまった空間で、こらえきれなかった罪悪感を吐き出す。

また、同じことを繰り返してしまった。

今度こそ、ちゃんと話をつけようと、逃げずに、後悔をしないようにと行動したはずなのに。

また、上手くいかなかった。

じゃあ、今度はどうすればいいんだ。

逃げられてしまったからといって、じゃあこのまま自分も逃げよう、というわけにはいかない。

八方ふさがりな状況に、どうすればいいんだ、と悩むことしかできない自分が、どうしようもなく、情けなかった。

「はあ……」

気持ちに引っ張られるように思い足を引きずって帰宅して、自室のドアを開けると、早々に溜息が出た。

一日中締め切っていた部屋は空気がじとじととしていて気持ち悪い。

窓を開けようかと思ったが、帰り道で感じたこの季節特有の湿度の高さを思い出して、それも諦める。

鞆を机の横、いつもの場所に置くと、そう言えば、と思い出し窓際に置いていた鉢植えを確認する。

土の表面を見ると、やっぱり水をやるのを忘れていたのか、乾ききっていた。

かもしれない、とは思っていたが、日課になっていることも忘れるなんてどれだけ悩ん

でいたんだ、と薄く笑ってしまう。

「痛いことが苦手、か」

溜息を吐きながら、いつも繰り返してる水やりのルーティーンをこなしながら、釈然としない頭を整理するように、一番の疑問を言葉にする。

痛いことが苦手。

帰り道、電車に揺られながらも、歩いている間も、必死に考えていたが、それがどういう意味なのか、はつきりとこれが正解だ、という答えは導き出せなかった。

確かに、野中の言葉通りだったとしたら、ピアスに怯えるような反応を見せたのは納得できる。

それで、ピアスを多く開けている俺が怖かったから告白をなしにしようとした、ということなら、これほど悩まず話を終えることが出来ただろうに、本人からそれは違うと否定されてしまった。

それなら、どうして野中はあんなに突然俺のことを拒絶したのだろうか。

・痛いことが苦手。

俺に与えられたヒントはこれしかない。

何かの暗喩かと思ったのだが、野中がああ咄嗟の状況で、そんなことを言う人間だとは思えなかった。

それじゃあどうして？ という疑問が消えない。

自分が持つてる引き出しを全部引っ張ってくるような勢いで、必死になって頭を回転させる。

痛いのが嫌い、ということは何なんだ？

昔何かあったとか？ でもそれは説明されなきゃわからない。

野中と付き合っていた期間で、小学生や中学生の時のことを話すことが多々あった。

その時はないも言っていなかったから、少なくともその可能性は薄いだろう。

じゃあ、リストカットかも……と考えてしまったところで、慌てて思考を切り替えるように首を左右に振る。

痛いのが嫌い、というんだったら、自分から痛みを求めるような行動はしないだろう。

じゃあなんだ？ と首を捻ると、思考に没頭しすぎたのか、ピアスホールを爪で弾くように触ってしまい、ピリツとした強い痛みが走る。

その痛みの鮮烈さにはっと目を覚ましたように思考が現実に戻され、手元を見ると植木鉢の土から水が染み出してきているのが目に入り、慌ててじょうろの口を上に向ける。

もうこの花を育てるのに慣れてきた今、水をやりすぎるなんて凡ミスするのは久しぶりだった。

水をやりすぎると根腐れを起こすから、と気を付けていたのに。

やってしまったな、と思いながらじょうろを床に置き、労わるように花びらを撫でたところで、はっと、一つの可能性が浮かび上がってきた。

——もう一つ、痛みに関する事、痛みが否応なしに日常の一部になってしまうものが

「花樹病……」

もし、野中が花樹病に罹っていたら？

そう考えると、痛いことが苦手と言っていたのも上手くつじつまが合う。

痛いのが苦手、という言葉が、元から痛いことが苦手だったのか、それとも花樹病に罹ってから苦手になったのかはわからない。

でも、日頃痛みを我慢して過ごしているのに、そんな中で好き好んで痛みを伴うピアスを開けている俺に会ったら？

俺のことを怖いと思っても、拒絶してもおかしくはないのではないか。

憶測でしかないが、やっとたどり着けた答えに、息の詰まるような重圧が、少しだけ軽くなる。

「謝らなきゃ、だな」

もしこの憶測が正しかったのなら、俺は野中に相当酷いことをしていたことになる。

最悪だ、もう顔も見たくない、と言われてしまう可能性も少なくはない。

だけど、もうそんなことを怖がってなんかいられない。

行動しなきゃ、考えてるだけじゃ何も変わらない。

……俺自身が、変わらなきゃいけないかった。

一日中薄暗く、季節に関係なく寒々とした霧囲気のある小道を、少し緊張したように歩いていく。

めったに来ない場所だということもあるのだが、いつ、どういう目的で来たとしても、毎回ここに来るときは絶対に緊張してしまう。

場所の霧囲気がそうさせているのだろうか、それとも、気持ちに引っ張られているのだろうか。

湿った土の上を歩きながら、おぼろげな記憶を頼りに目的の場所まで足を進めていく。

一年に一回しか着ていなかった場所だから、大体の場所しか覚えてなかったのだが、なんとか記憶を辿っていった道と同じように進むと、迷うことなくきちんとたどり着いた。空を見上げると、この時期には珍しい晴天だった。

雨が降らなくてよかった。

雨が降ってたら、きっとその空気に引っ張られて、ここまで来るのをやめてしまおうかと思っただろうから。

桶に入れた水をかけ、来る途中に買ってきた花を供えて、線香をあげて、手を合わせる。まだ日が高い午前中、ちょうど今は二限目の授業が始まるころだろうか。

年に一回どころか、高校を入学して初めて、わがままを言って親に午前中だけ授業を休ませてもらった。

てっきり、駄目だといわれると思っていたのだが、理由を話すと、思っていた以上にすんなりとわがままを受け入れてもらえたのはありがたかった。

「……椿」

わがままを言ってまで来たのは、椿の墓参りだった。毎年、罪悪感と申し訳なきで命日にしか来られなかったここに来たのは、自分なりの気持ちの区切りをつけるため。

三年間で、いろいろなことが変わった。俺は中学生から高校生になったし、あの時の椿と、今年で同じ年になる。

あの時はまだギリギリ追い越せていなかった背も、三年でとっくに追い越してしまった。苦手なことがいくつかできるようになったし、逆に好きだったものが苦手になったといういいのかわからないけど、約束通り、花もずっと育ててる。これでいいのかわからないけど、約束通り、花もずっと育ててる。

……そんな中で、変わってないのは俺だけだった。でも、もうそれも終わりにしなきゃいけない。

ぐっと、握ったこぶしに力を入れ、無理やり笑顔を浮かべる。きっと、椿がここにいたら、情けない顔と笑われるだろう。

「直接言えなかったけど、あの時椿に恋してるって言うてすごく動揺した。椿の隣に、俺以外の誰かが立つのが嫌だった」

でも、これは俺が今できる精いっぱいだから、このままでいい。

「……そろそろ、前に進むな」

椿を忘れるわけじゃない。

ただ、ずっと弱気になって、理由を作って、言い訳をして、逃げ続けてきたことと向き合うだけ。

このまま逃げ続けるのは簡単だし、そっちのほうが楽だということも知ってる。

だけど、ここで俺が逃げたら、またあの時の繰り返しになることも十分理解してる。

もう、弱音を吐き続けるわけにはいかない。

ずっと縛られてたら、前に進めない。

椿も、こんなに俺が悩み続けていたら満足して成仏できないかもしれないな、なんて考えてしまうが、そうだったらもう三年も経ってるんだし、手遅れかな、と自分の考えに笑ってしまう。

「ありがとう、椿」

野中と話をつける前に、どうしてもここに来ておきたかった。

ここに来たとしても、椿に許されるわけじゃない。

だけど、少しでも、誠実に野中と話ができるように、ほんの少し勇気が欲しかった。

「俺、頑張るから」

きちんと、後悔に区切りをつけるように声に出してそう言うと、踵を返して、墓前を後にする。

歩き出すとともに吹いてきた追い風が、背中を押してくれるようだ、と思ってしまうのは。

少し、身勝手な勘違いなのだろうか。

第四章 開花

教師や友人たちからの質問攻めをなんとかやり過ぎして、ついにやってきてしまった放課後。

野中に事前にメッセージで伝えていた集合時間から、もうすぐで三十分が経つ。逃げられてもおかしくはない、とは思っていたが、実際逃げられたかもしれないと思うと、思うようにいかなくて段々とどうしたらいいのか、と不安になってくる。

呼び出しが駄目なら、次はまた俺から会いに行くしかないか、と次の手を考え始めたところで、階段を上ってくる足音が聞こえ、ほっと息を吐く。

「遅くなってすみません」

「来ようか迷った？」

「それは……」

おずおずと、目線を合わせずに謝ってくる野中に対し、反射的に質問してしまい、少し後悔する。

怖がらせたいわけでも、怒っていると伝えたいわけではないし、事実不安になっただけで怒ってないのだ。この言い方は完全に間違이었다。

「ごめん、言い方間違えた」

一度仕切りなおすように言葉を挟むと、なかなか視線が合わない野中の瞳を真っ直ぐに見据え、口を開く。

「話が見たいんだ」

有耶無耶なままで関係を終わらせるわけにはいかなかった。

どちらか一方が逃げてしまえば、何もできずに終わってしまう、というのを誰よりも理解してるつもりだから。

だから、ここで怯えて逃げるわけにも、野中を逃がすわけにもいかなかった。

「そう、ですか」

きちんと意思が伝わってくれたのだろうか。

野中はそっと呟くと、俯きさ迷わせがちだった視線を、なんとか上げてくれた。

「それでちょっと聞きたいんだけど、いい？」

そのことにまず安堵し、少し肩の力を抜いて問いかけると、こくりと静かな肯定が返ってくる。

「痛いことが嫌って、言葉通りの意味？」

「……はい」

「じゃあ、それって昔から？」

「はい。小さい頃から、ずっとです」

「そっか」

まずは核心に迫る質問から、そこから淡々と、細やかな詳細を求める質問を重ねていく

あとは、疑問を確信にするだけ。

「じゃあさ、少し辛いこと聞いちゃうかもしれないんだけど、大丈夫？」

「……はい」

何を聞かれるのか察したのだろうか、野中の表情が少し強張った。

聞き方を間違えてはいけない。

遠回し過ぎても、攻撃的になってもいけない。

一度、緊張でどくどくと逸る心臓を抑えるように深く息を吐いて、ゆっくりと口を開く

「もしかしてなんだけど、その原因って花樹病だったりしない？」

「え？」

驚きと絶望が入り混じったように、さつと血の気が引いたように野中の顔色が悪くなる

。何かがおかしい、と感じたのとほぼ同時に、くらりと、野中の体が力が抜けたように揺れて。

「……あれ、」

「……野上！」

ふらつとその場に力なく膝をつく野上に手を伸ばす。

タイミングも、状況も最悪で、反射的に、脳内であの病室の風景がフラッシュバックする。

迷ってる暇なんてなかった。

これが正しい行動か、なんて考え始めるより先に体が動いて、野中の体を支えるようにして抱き上げ、保健室へと走っていた。

かち、こち、と時計の秒針の音が響く部屋の中。

何分くらい経っただろうか。

何もする気が起きず、ぼんやりと窓の外を眺めていると、静かだった部屋の中に、小さく身じろぎをする音と、あれ？ という戸惑うような声が届いた。

「目覚めた？」

「……先輩？」

ベッドを仕切る薄いカーテン越しに声を掛けると、目が覚めたばかりで状況を把握しきれてないのか、不安そうな声が返ってくる。

「開けて平気？」

「はい」

許可を取ってカーテンを引くと、野中はベッドの背に体を預けるようにして、体を起こしていた。

ここに来た時よりも少し顔色が良くなったようで、ひとまず安心して息を吐く。「話してる途中に倒れたから保健室に運ばせてもらった。軽い脱水症状だって。はい、これ」

「ありがとうございます」

簡単に状況を説明し、買ってきておいたミネラルウォーターを手渡すと、やっと頭がさえてきたのか、野上は両手でしっかりとペットボトルを受け取ると、ぺこりと頭を下げる。

花樹病は花を咲かせるという性質上、脱水症状に陥りやすいらしい。

痛み意外にもそんな難点があるのか、とまた一つ深くなった知識と共に、自分の無力さにぐっとこぶしを強く握ってしまう。

「先生は用事があるって職員室にいるよ。呼んで来ようか？」

「いえ、大丈夫です」

流石にこのまま話を切り出すわけにもいかないし、どうしたらいいか、と思いつつ言葉を選んで問いかけるが、ぼっさりとは断られ、言葉が続けられなくなってしまった。

目を改めたほうがいいのか、それともこのままもう少し時間が経つのを待ってから話を切り出すか、と悩んでいると、野上がそっと制服の袖口を直し、自分の腕を確認するのが見えた。

「……腕、見ました？」

説明しなきゃ、と思う前にそう問いかけられ、言い訳も何もするつもりはないが、できなくなってしまったな、と素直に頭を下げる。

「うん、ごめん」

野中をここまで運ぶ最中に、わざとではないとはいえ、腕に走っている特徴的な痣があるのを見てしまった。

隠したかったことだろうから、勝手に見てしまったのは本心から反省している。

最悪、ここでもう話したくないです、と言われるのも覚悟していたのだが、野中から返ってきたのは。

「別にいいですよ」

という、許しの言葉で。

「え？」

「先輩にだったら別にいいですよ」

まさか何も言わず許されるとは思っていなかったため、咄嗟に頭の中で言葉が出てこず、代わりに間抜けな声を発してしまう。

そんな俺とは対照的に、野中は静かに笑うと、冷静に言葉を選んでいようだ。

「倒れる前、ちよっと曖昧なんですけど、この病気のこと知ってるんですよね」

「……知ってるよ」

自分から話しをしようとしていたことだったが、実際にぐっと踏み込まれると、少したじろいでしまう。

あの時は完全に自分のペースで話を進めようとしていたのだが、今は野中が話の主導権

を握っているのが原因なのだろうか。

「それなら、いいです」

どこか自分を納得させるように繰り返された野中の言葉に、チクリと罪悪感が刺激される。

勝手に見てしまったことを再度謝りたい気持ちはあるが、ここで俺が謝ったら許すと言ってくれた野中を侮辱することになるだろう。

上手く言葉が探せずに歯がゆい気持ちを拭いきれずにいると、野中がすつと、静かに息を吸う音が耳に届いた。

「この間はごめんなさい」

沈黙を破るように、静かに発される野中の声に、驚いて目を見開いてしまう。

「理由も言わないで逃げるなんて勝手に勝手でしたよね」

「いや、こっちこそごめん。色々勝手に勝手な行動が多かった」

野中に続くようにして、慌てて俺も謝罪を入れる。

ぐいぐいと進んでいく野中の話に圧倒されながらも、しっかりと話を聞こうと、話をしようとして、気持ちを落ち着かせるために深く呼吸をする。

「私、小さい頃から痛いことが嫌いなんです」

ぽつりと、独白のように落とされた野中の言葉に、そつと耳を傾ける。

「注射とかもそうですし、紙で指を切ったりとかそういうのも嫌いなんです。ほら、痛いことって悪い印象しかないじゃないですか」

へらつと、無理矢理取り繕ったような笑顔を浮かべる野中に、見ているこっちまでぎゅつと心臓が締め付けられるように痛むような錯覚に陥る。

無理しなくてもいい、無理して笑わなくてもいい、と言ってやりたいが、ここでそれを言うのは俺のエゴでしかないだろう。

「だから、意識的に痛いことをするのは避けてたんです。嫌な思いを増やしたくなくて、それで」

今、俺にできることは、静かに、野中の話を受け入れることだけだった。

「それなのに、これ。出ちゃったんですよね」

きゅつと、制服の上から、痣が走った腕を掴む野中の声は、さっきまでの虚勢を失ったように、苦しそうに響く。

「お医者さんから、進行自体は遅いって言われてるんです。最初に出たのは半年前くらいなんですけど、腕以外に広がってないのよ」

「そうなんだ」

椿は数か月で花が咲いた、ということを知っているから進行が遅いというのはその通りなのだろう。

だけど、半年間ずっと、痛みと過ごすことを余儀なくされるといことは、痛いのが嫌いと知っている野中には耐え難いことだっただろう。

「このこともあって、痛いことに関して前よりも少し敏感になっちゃって。だから、すみません」

「いや、それなら謝るのは俺のほうだろ」

最初に野中が俺を拒絶する原因を作ったのは、間違いなく俺自身なのだ。

「いいえ。何も言わずに拒絶したのは私なので、いいんですよ」

ここで野中が謝る必要はない、と慌てて訂正を入れるが、野中の意思は固く、謝罪を撤回することなく話は続けられる。

「ねえ先輩。一つ聞いてもいいですか？」

「……うん、いいよ」

「先輩はどうしてピアスを開けたんですか？」

ここまで全部、野中が話してくれたのだ。

今度は、俺が説明する番だ。

「上手く話せないと思う。それでもいいか？」

あの時、野中に話をつけると決めたとときから、どうやって話せば一番わかりやすいかをずっと考えていた。

話を盛ることも、嘘を吐くこともしたくない。

だけど、今まで自分の気持ちから逃げ続けてきた俺が、上手く自分のことを話せる自信がなく、言い訳のように前置きをしてしまうが、野中はそんな俺にも変わらず笑いかけてくれる。

「はい……先輩の話を聞けるのが、一番大切なことなので」

「ありがとうございます」

野中ならここで、俺にキツイ言葉を掛けることもできるだろうし、その権利もある。

だけど、それをしないのが、野中が持つ、何よりのやさしさだった。

「少し、重い話になるんだけどさ」

握っていたこぶしを解き、祈るように膝の上で手を組みなおす。

こうすると、こぶしを握っていた時よりも手の震えを誤魔化せなくなるが、でも、それでいいと思ってしまった。

「昔、好きな人が花樹病に罹って亡くなってるんだ」

「え……」

驚くような、それでいて俺を案じるような雰囲気で落とされたその一言に、野中の心情をさっして苦笑を浮かべる。

「アガパンサスっていう花知ってる？ 青い小さい花びらがいっぱい集まって一つの花になってる紫陽花みたいな花なんだけど」

窓際に置いた鉢植えと、あの時の病室で見た光景が重なっていく。

「それが咲いてね、亡くなったんだ」

あの時のことを思い出そうとすると、今でも泣きそうで言葉が詰まる。

「幼馴染だったんだけどね、好きだったんだ。だけど、どうしても好きだっていうことを認めたくなくて自棄になってたら、それを伝えられないままになっちゃって」
「ただ、ここで泣いても何も意味がない。」

「ものすごい後悔したんだ。それこそ、何年もずっと引きずるくらい」

話すって決めたなら、きちんと最後までやり遂げる必要があるから。

「それで……すごく申し訳ないことを言うんだけど、あの時は本気で花樹病に罹りたいと思ってたんだ」

組んだ手に力が入り、痛みを訴えてくるが、そんな痛みを構っていられる暇がなかった

。「花樹病に罹って、好きだった人と同じ痛みを味わえばって、本気で思ってた」

声に涙がにじんでいくのを、奥歯を噛んでぐっと耐える。

ここは俺が泣くべき時じゃない。

泣いていい時でもない。

。「本当は、そんなことないのにね」

もし、今ここで話すことを止めてしまったら、続きを口に出せなくなってしまいそうで

。「だから、ピアスで誤魔化してたんだ。ピアスって開けてから暫くは痛みが続くから」

軟骨のピアスホールを指でなぞりながら、詰まりそうになる息を吐きだし、口の中に溜まってくる唾液を飲み込む。

。「……そう、だったんですね」

どこか気の抜けたような、圧倒されたような声を返してくる野中に笑いかけ、勢いを失わないように言葉を続ける。

。「今日呼び出した理由、もう一つあるんだけど話してもいい？」

こくりと頷く野中に笑いかけ、跳ねる心臓を抑えるように深呼吸をして、最後の最後、心の準備を終える。

。「こんな話をした後だし言っても信じてもらえないかもしれないけど」

捨てきれない臆病さで、そんな前置きをしてしまうが、しっかりと野中の目を見据えて

。「俺、野中のことが好きだよ」

はつきりと、今日一番伝えたかったことを口に出す。

。「最初は、告白を受け入れて一緒にいられれば昔のことを忘れられるかもっていう罪滅ぼしのつもりだった。だけど、今は違う」

緊張なのか、それとも他の感情なのかわからないが、さっきから握った手の震えがずっと止まってくれない。

。「野中が、真っ直ぐに俺にぶつかってくれるから、いつの間にか、野中のことを好きになってた」

少しでもこの気持ちが野中に伝わるように。

罪滅ぼしでも、罪悪感からくる感情でもなく、この気持ちはきちんとした俺が抱いた恋心なんだ、と伝わるように、慎重に言葉を選んで。

。「俺と、付き合ってくれる？」

。「はい！」

不格好に微笑みながら、最後の言葉を告げるとほぼ同時に打ち返された野中からの返事

の勢いの良さに、さっきまでの空気は何だったのか、と言いたくなってしまい、ギャップに思わず笑ってしまう。

「俺が言うのもなんだけど、そんなすぐに返事して大丈夫なの？」

くつくつとこみあげてくる笑いを、口元に手を当て必死にこらえようとしつつも野中に聞いかけると、爛々と目を輝かせた野中が身を乗り出すようにして言葉を続ける。

「大丈夫です！　だって、私は……私も、先輩のことが好きなんですから。先輩も私のことを好きでいてくれるなんて、それ以上の幸せはありません！」

力いっぱい、素直に好意をぶつけてくれる野中の笑顔に安心してる自分があると、再度はつきりと確認する。

「ありがとう、野中」

あの時は、初めて野中の告白を受け入れたときはただの気まぐれだったかもしれない。だけど、その気まぐれが、今では前に進む大きな一歩になったことに、安堵と、多幸感を覚える。

後悔だけは、と思い続けていた時とは、大きな違いだった。

まだ完全に、未練を断ち切れたわけではないかもしれない。

だけど、これは。

逃げずに、諦めずに自分で勝ち取った、確かな幸福だった。

エピローグ　芽花かす

午前九時半。

日曜日ということもあり、人でごった返す駅の中を歩いていく。

待ち合わせまであと三十分。

到着は俺のほうが早いほうがいいだろうと、早めに家を出たのだがどうやら先を越されてしまったらしい。

「お待たせ」

待ち合わせ場所にいた人物に声をかけると、俺の姿を映した瞳がぱつと輝いた。

「こんにちは、先輩！」

「こんにちは。待たせてごめんな」

「いえ、楽しみで少し早く着きすぎただけなので……」

元氣よく挨拶をしてくる野中に挨拶を返しつつ、謝罪の言葉を述べると、野中らしい素直な言葉がぶつけられ、思わずかわいいな、と笑みがこぼれてくる。

「でも、こういうときって、お待たせ、まった？、ってやるのが定番なんじゃない？」

「そう……そうですね……」

かわいらしい野中の反応に、いたずら心が沸いてしまい、どういう反応をしてくれるの

かなと試してみると、さっきまで満点の笑顔をたたえていた野中の顔が、わかりやすくしゅん、と落ち込んでいく。

「そんなに残念がらなくても、また次やればいいよ」

訂正するようにそう言ってみると、ばあっと、花咲くように野中の顔に笑顔が戻ってくる。

付き合っただけの頃、鶴には野中のことを猫だとたとえたが、こういうところを見ると、やっぱり犬のほうが適切なたとえまな気がしてきた。

きつと、元気いっぱい動く尻尾と耳が、感情をわかりやすく伝えてくれるだろうから。

「そう、ですね！ 次はそうします！」

俺の言葉で一喜一憂する、相変わらずのわかりやすい反応を楽しみつつ、腕時計で時間を確認する。

約束していた映画の上映時間は十時半。

早すぎる気もするが、遅れるはいいだろう。

「じゃあ、行こうか」

一歩、足を進めようとしたところで、そういえば。と、あることを思い出し、腕時計を見るために上げた手をそのままの中のほうへ伸ばす。

「へ？」

「手、繋がらないの？」

「つながります！ つなぎたいです！！」

初めて手をつなぐのはデートでいい、と言ったのを思い出して手を差し出したが、もしかしてタイミングを間違えたか？ と内心不安になるが、野中が勢いよく返事をしてくれたおかげで安心する。

伸ばした手を恐る恐る握られ、重なった手をそっと握り返すと、繋いだ手越しにもわかるくらいびくりと飛び跳ねられ、わかりやすく声を出して笑ってしまう。

「そんなに驚かなくてもいいのに」

「家族以外と手をつないだの、幼稚園の頃以来なので……」

ツボにはまってしまったのか、なかなか笑いがおさまってくれない俺の様子が気に食わなかったのだろうか。

野中が少しむっとした様子で、繋いだ手にぐっと力を籠め反論してくる。

「俺も同じ。緊張して手汗かいたらごめん」

深呼吸をして、なんとか笑いをこらえてそういうと、野中が求めていた返答をちゃんと当てられたのか、野中の顔に笑顔が戻ってくる。

「いえ、それは私も同じなので」

「そっか」

野中と同じだ、と伝えられ、不思議とその言葉の暖かさに心がふわっと浮足立つ感覚がした。

今までは、後悔に引っぱられて積極的にできなかった未来の話もできる。

当たり前の延長線上の、今しか感じることが出来ない貴重な幸せも、しっかりと逃げる
ことなく受け止めることが出来る。

「野中、ありがとな」

突然だということもわかっていたが、どうしても言いたくなってしまう隣にいる野中に感謝を
伝えようと、一瞬驚いたように目を見開いた野中だったが、すぐにその目が幸せそうに弧を
描いた。

「いえ、こちらこそ」

偽ることなく、真っ直ぐに伝わってくる野中の暖かさが愛おしくて。

繋いだ手から伝わる温かさが心地良くて。

まるでその温かさが幸福の象徴なんじゃないか、と。思ってしまったのだった。